

あんようじ もくぞうでんほつとうこくしぎぞう
安養寺の木造伝法燈国師坐像



指 定 県 宝 平成 22 年 10 月 18 日
所在地 安 原
所有者 安 養 寺

本像は^{ひのき}桧材寄せ木造りで、両肩先および衣掛けは左右 4 枚のつぎ付けからなっており、内部はくりぬかれている。白絹の下地に漆塗りで彩色および模様を施す。

等身像で、水晶をはめこんだ両目は伏し眼がちに^{ふかん}俯瞰（高い所から見おろす）し、鼻すじのとおった細面、固く結んだ口もとには^{たんげん}端巖（ただしくおごそか）な国師の意志をうかがわせている。

衣服には青っぽい色彩が施されており、そのところどころに繊細な模様がかかっている。きっちりとした襟もとや袈裟のかけ具合などからは清潔感がただよう。

制作年代を示す銘記はないが、両膝間や左袖口に見られるように、衣の彫りには部分的に強い稜の立った工法が用いられており、地方仏師による鎌倉様式を伝える室町中期の作と推定される。

法燈国師は鎌倉中期の臨済宗の高僧、承元元年（1207）から永仁 6 年（1298）ころ、筑摩郡神林郷に生まれる。無本覚心、法燈国師は後伏見天皇からの^{おくりな}諡（死者に贈る名）で、後醍醐天皇からは^{ついでし}円明国師と追諡された。後深草上皇の発願により安養寺の開山となったと伝えられている。

法量は、胴高 85.0cm、頂～顎 25.2cm、髮際～顎 18.2cm、面幅 15.0cm、面奥 19.7cm、肩張り 37.3cm、肘張り 60.1cm、胸厚 28.7cm、膝張り 58.5cm、坐奥 60.5cm、衣掛け 60.0cm である。